國學院大學学術情報リポジトリ

インタビュー 道標：岡野弘彦名誉教授(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡野, 弘彦, Okano, Hirohiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000152

〔インタビュー〕

道標　岡野弘彦名誉教授①

今号から不定期連載で、インタビュー「道標」を掲載する。國學院大學に所縁のある方々にスポットを当て、自身の半生や、研究、大学での思い出などを語っていただいた。本企画の一回目では、平成二十五年に文化功労者に選ばれ、歌人としても活躍されている岡野弘彦名誉教授にご登場いただく。

大正十三（１９２４）年生まれの岡野弘彦名誉教授は、九十一歳。歌人として今も第一線で活躍している。日ごろから言葉の乱れに警鐘を鳴らしている先生に、幼少期から青年期までの思い出や、和歌そして日本語についての考えを聞いた。

—岡野名誉教授は、三重県で代々神主を勤める家の長男として生まれた。和歌には幼いころから触れてきたという。

岡野　小学校に行く前から歌を暗記させられました。正月に若水を汲むときの唱えの言葉とか、屋敷神や道祖神、山の神などへの唱えの言葉があります。大体、和歌に近いような形ですね。それから百人一首。僕の父親は青年の頃に、百人一首のかるた取りの八丁荒らしみたいに隣村を荒らし回っていたと聞きました。

まず、一音で取れる一枚札っていうのが、百人一首のうち七枚あります。

村雨の露もまだひぬ真木の葉に

霧立ちのぼる秋の夕暮れ
住の江の岸による波よるさへや
夢の通ひ路人目よくらむ

これらは、小学校行く前から、すべて暗記させられました。小学校に行くようになると、社殿で白い着物を着せてもらって座っているようになり、小学校の5年生くらいからは、参拝者の希望で御祈祷をしてあげるようになりました。商売繁盛とか家内安全とかね。祝詞をしょっちゅう社殿に行って聞いているから、暗記しちゃうわけです。世の中では満州事変が起きたころでした。

そのうち、地域のおじいさんやおばあさんが孫の武運長久の祈願に多く来るようになってきます。父親よりも「若さんに御祈祷してもらうのがありがたい」とか言って私に注文がくるようになるわけです。

後で知った話ですが、歌人の与謝野鉄幹が、まだ子供の頃、父親の与謝野礼厳というお坊さんのお経を聞いて暗記していて、おじいさん、おばあさんが子供の鉄幹のお経がありがたいと言ったという話があります。ちょうどそれと同じで、こまっしゃくれて没頭するようになっていました。そうして自然に文語体の祝詞や、和歌を覚えたのです。

子供だから、違いがはっきり言えるわけじゃないけれども、日常の会話の言葉と違った、不思議に魅力のある引き締まった調子の良い文語の文体があるということが、心にだんだんと見極めがつくようになってくるわけです。

—生まれ育った環境の中から、次第に言葉に対して興味、関心を持っていった。そして、当時は子供たちの読み物が盛んに出版された時代でもあった。

私の家は、山の中の一軒家で、村から3キロ離れていました。周りは大人ばっかりです。小学校から帰ってくると、自宅の2階の本部屋にこもって本を読んでいました。隣近所がないから遊び友達が近くにいません。妹が2つ下、弟が5つ下で、遊び相手にならないわけです。電気がない、ラジオがない、手回し蓄音機で、レコードの童謡なんかかけたって面白くないから本ばかり読んでいましたね。

ちょうど、菊池寛が文藝春秋社を起こして、『文藝春秋』という雑誌が出ました。子供向けにも割合よい本を出してくれま

したね。『小学生全集』には、少年向けの物語、神話もありました。第1巻が古事記物語。それからギリシャ神話、ドイツのニーベルンゲン神話、北欧神話。子供心には、古事記よりギリシャ神話の方がはるかに面白かったな。ニーベルンゲン神話も面白かったですね。小学校に行く前に文藝春秋社から直接購読していて、月に3回くらい配本がありました。

『幼年倶楽部』や『少年倶楽部』は、小学生でも読みごたえがあって面白かったですね。『赤い鳥』という子供向けの文芸雑誌もありました。

北原鉄雄のアルス社からは、日本児童文庫が出版されて、それには柳田國男や折口信夫の著作も入っていました。菊池寛や芥川龍之介などは、少年少女のために作品を書いてくれていました。芥川は、『杜子春』『蜘蛛の糸』『アグニの神』など、子供のために感動的なものを随分書いてくれています。杜子春が夢のような世界から覚めて、門の外で現実に帰るところなんか、自分の体験と杜子春の体験が重なって、読み終わったら呆然としていたのを覚えています。そういう体験ができた子供の頃は、恵まれていましたね。

満州事変が始まると、戦争物が多くなりました。「敵中横断三百里」とか、海軍の軍艦の話だとかね。だんだん火薬の臭いがするようなものになりました。満州事変が始まるころは、まだ良き大正リベラリズムから、昭和の良き教養主義時代の匂いが残っていました。そのころのものが懐かしいですね。

―戦火が拡大する中、岡野名誉教授は皇學館に進んだ。中学校は全寮制で「窮屈な時代だった」と振り返るが、そのなかで國學院大學への進学を志すことになる。

中学校に入った年に日中戦争が勃発。勇ましい軍歌がしきりに歌われるようになったりして、殺風景になりました。

皇学館の教科書には、折口先生や武田祐吉先生、金田一京助先生など國學院の錚々たる先生たちの文章、短歌が出ていました。伊勢の神宮にある神宮文庫で、ちょっと背伸びして、国文学の本なんか読んでも、國學院の先生はやっぱりいいなと思った。そこで父親にねだって國學院大學への進学を目指しました。中学が終わってから1年浪人しました。

国語・漢文は得意だったけれど、皇学館では英語の時間が極端に少なかったから、大阪のＹＭＣＡ予備校に通い英語を学び、更に個人教師について、やっと昭和十八年に國學院大學予科に入れました。そのころの國學院は倍率が高くて、國學院の

学問の一番充実していた時期でしたね。

—國學院大學予科に入学したのは昭和十八年。日中戦争、大東亜戦争と底なし沼のように戦争に引きずり込まれていった時代だった。岡野少年をはじめ、少年たちは戦時下の周りの雰囲気に刺激され感化されることが多かったと振り返る。

國學院の予科へ来て、話の合う同級生と話をしているうちに、「俺は特攻隊を志願する」とか、「陸軍の特別操縦士官を志願する」という話になりました。そうか、俺も行く、僕も行くと言って、書類を取り寄せましたが、ついには上京してきて一晩徹夜で父親から必死に止められて、断念しました。

同級生の板倉震君は、陸軍特別操縦見習士官に志願し、特攻隊に加わりました。お父さんが亡くなっておられて母子家庭でした。彼の遺言はお母さん宛で「今まで本当に我儘で、種々御迷惑、御心配ばかりかけて来ました。親不孝だったのですね」という言葉から始まるんですよね。

同じ特攻隊でも戦争末期の頃、彼が率いていったのは、十六、七歳の少年航空兵ですよね。彼らが書いた遺書というのは、自分の考えなんてない、ただ天皇のために、と書いてあります。板倉君は二十一、二歳ですから、母親への不孝をわびています。

特攻隊の第一期のころは、操縦技術も巧みで百戦錬磨した大尉とか少佐になった人が隊長になっていたんです。知覧特攻平和会館で戦死した特攻隊員の遺書を読んでみると、家族を持っている人の遺書からは、人間的な切実なものが出てきています。年齢の差と人生経験の違いが分かりますね。特攻隊員の遺書にも、年齢差、人生経験の違いが出ています。少年航空兵たちは痛々しいほど無我夢中になって行ってしまいました。沖縄戦の段階では、まったく一方的な消耗戦で、あんなに少年たちを殺すことはなかったんだと思います。

—昭和十六年に始まった戦争がいよいよ泥沼化していた十八年春に岡野名誉教授は國學院大學予科に入学。戦争真っ只中ではあったが一学期の間は講義を受けられたという。しかし、同年五月には学徒出陣が決定、十月には多くの大学生が戦地に送られるようになった。

予科一年の二学期から鐘ヶ淵の軍需工場へ勤労奉仕に行って、銃弾や薬品、衣料品を戦地へ送っていました。予科二年に

なった昭和十九年六月からは愛知県の豊川海軍工廠へ全クラス、百二十人が移動した。全国から集まってきた東京大学、早稲田、慶応、國學院、関西から京都大学など、同志社・立命館など十校あまり。

豊川海軍工廠というのは七万人の工員がいて、戦艦大和、戦艦武蔵の装備を全部作ったところです。外へは漏らさなかったけれども、海戦で調子がいいのはほんの初期だけです。だんだん航空母艦が沈められて、希望がなくなっちゃうわけです。海軍工廠に行ったら、敗戦を体験して予備役に廻された海軍少将が工場長になっていた。その人が言うんです。「このままでは日本は負けるよりほかない。君たち、弾ひとつでもたくさん作って送ってやってくれ」と。海軍少将がこんなこと言っていいのかとびっくりした。それで僕たちは海軍工廠でひたすら兵器を作った。十九年はそんなふうに過ぎて、二十年一月六日に僕は招集令が来て軍隊に入りました。

—豊川海軍工廠には、たびたび折口先生、武田先生、のちに学長になった佐藤謙三先生が来られて、学生たちを激励していたという。

佐藤先生は、ポータブルの蓄音機とレコードを持って、重いのに来て下さるわけです。米英の音楽は禁じられているからドイツなどのレコードを持ってきてくださった。それから自分の書庫から岩波の文庫本も。五、六冊、来る度に持ってきて「ほら、分け合って読むんだぞ」と分け与えていました。あぁ、この先生はいい先生だな、先生の書庫が空になっちゃうんじゃないかと思ったりしましたね。

—学生時代を振り返って、勉強すること、本を一生懸命読むことの重要さを強調する。

旧制中学、大学予科、旧制の高等学校あたりから、私たちは自立した思想というものを持てるようになるわけですから、あの年齢が一番大事なのです。そのためには、やはり勉強することなんだな。本を一生懸命読むことですね。よい本をじっくり読まないと自分の言葉、自分の文章、自分の表現が生まれて来ないんです。ノーベル物理学賞を受賞した湯川英樹さんなど、すぐれた科学者は、すぐれた言語表現力を持っていられました。特に文科系の大学では、日本人が日本の言葉で古代から現代までの人間の考え方、感情を、緻密に大事に読み取り反芻

し、更に深く考え、力ある表現ができるということが、大事な問題なのです。（つづく）